SEMINAR HOUSE NEWS
セミナー・ハウス'92春

＝巻頭＝

●騎士道をめぐって

＝第157回大学共同セミナー＝

●サムライ・ニッポン――日本人再考――

●法人ニュース

●業務通信　冬季３ヵ月の合宿研修から

●花・新緑のなかのフレッシュマン

セミナー・ハウスは，いま，新入生合宿に彩られて

（上）　満開で歓迎，名物しだれ桜

（中）　シンポジウムのステージに居並ぶ教師と上級生（学習院大学政治学科の初の試み。オリエンテーションセミナー）

（下）　野外ステージで（共栄短大の各専攻グループ）

Plain living and high thinking

No.126

第157回大学共同セミナー●ゲスト講演１より

騎士道をめぐって

東京大学文学部教授　樺山紘一

日本語で「騎士」と表現するこの語には、ラテン語では「ミレス（miles）」、英語では「ナイト（knight）」、フランス語では「シュバリエ（chevalier）」、ドイツ語では「リッター（Ritter）」というように、それぞれの国で違った語源に属する言葉がある。しかもミレスというラテン語はローマ時代から存在し、ヨーロッパ中世を経て、実は絶対主義時代にも通用していたし、ナイトとかシュバリエは今でも使われている。

「騎士」というものが、いかにそれぞれの社会に固有なものとして成り立っていたかがわかる。まず、ひとことで騎士と言ってしまうことの危うさを覚悟しなければならない。

騎士の起源と三つの奉仕義務

さて、十一世紀初めから後半に至るヨーロッパ世界では「祈る人」（聖職者）、「戦う人」（戦士）、「耕す人」（農民）という三つの身分が存在していたが、騎士は言うまでもなくヨーロッパ封建社会のなかに戦闘集団として成立した「封建戦士」の総称である。もちろん、この場合の「戦う人」は、国王から、わずかな領地を持つに過ぎない下級家臣に至るまで多様な身分を含んでいた。

この騎士たちは封建的な秩序構造のなかで、主君から領地や特権を与えられて社会的身分を保証される代わりに、主君に軍役奉仕を約束するという双務契約を結んでいた。もっとも、その家臣である騎士が自分の手元にもう一つ別の下属家臣をつくることもある。

②

そのような場合に、すべてを騎士と呼べるのかどうかは、社会的な習慣の違いもあるので一概には言えない。

ここではいちおう、主君と臣従契約を結んだものは「騎士」と呼ぶことにしたい。

この騎士たちは単に主君に対して戦闘出陣を義務づけられているだけではなく、実は、それに付随するいくつかの任務もしくは義務を負っていたと言われている。一つは「神に対する奉仕」、もう一つは「婦人に対する奉仕」である。前者は言うまでもなく、さきほどの「祈る人」つまり「聖職者に対する奉仕」である。

騎士は主君との契約にさいして、直接的にこれを誓約するわけではないが、「神に対する奉仕」すなわち具体的に言えば、キリスト教会に対する奉仕義務を負ったと了解する。だから例えば、十字軍遠征や異教徒、異端との間の闘争にあってはキリスト教会を扶助する。

後者は一体いつ、どこから、どんないきさつで騎士の役務のなかに取り入れられたのか。

いくつもの論争があるが、これもほぼ十一世紀末もしくは十二世紀初頭より西南フランスに始まり、急速にヨーロッパ各地に受け入れられていった観念である。

例えば婦人が遠方へ騎行する場合など、騎士たちは主君に対するのと同じように、この騎行を守らなければならないとされたのである。

以上のような三つの奉仕は、文字通り騎士に対して等しく義務づけられていたが、常に時代を通して同じ形であったわけではなく、差し当たり一一〇〇年代ごろから、ようやく姿形を見せ始めた、一種の理想型であった。

ともかくこのような三つの奉仕と、与えられた役務を常に理想的に執り行なう人格的な名誉や、逆に名誉が毀損されたときにこれを取り戻す強い責任感とがあわさって、十二世紀末頃までに「騎士」および「騎士道」と呼ばれるものがヨーロッパ世界に成立したと考えることができる。

騎士の実像

ところで、騎士はヨーロッパ史上、どこにも存在しなかったという人がいるほど、現実の姿は私たちが理解している騎士の理想像とはかなり違うものだったようだ。

まず騎士たちは鎧や兜、旗や紋章などそれぞれ自分のアイデンティティを明確にするために様々な装飾品を身に付けるようになっていった結果、全部あわせて馬に乗ると、恐らく軽くても四十キロ、重いのでは六、七十キロにもなってしまった。

このため騎士たちは儀礼性において突出してしまい、現実の戦闘では役に立たなくなって、しだいに軍事的な有効性を果たさなくなっていったのではないかという疑いがある。

騎士という語が史料上に広汎に現われてくるのは、十一世紀半ば以降に過ぎない。史料を逐一検討してみると、その時代にあっては、騎士は決して社会のなかで重要な地位を占めている上層の人々だけではなかった。むしろ

自分で防具を付け、武器を持ち、主君の下で戦闘に参加する、戦闘能力をもって評価された中下層の一群の人々が指称される。

すなわち封建軍隊の戦闘者一般ではなく、十一世紀のある時代の、ある場所から始まって、やがて十二、十三世紀にかけてヨーロッパ社会で重要な役割を果たすようになった、ある種の身分の人々が特殊に騎士と呼ばれたのである。しかも、かれら騎士たちは封建軍隊のなかで圧倒的な有能さを誇るようになり、どこの国にあっても戦闘の中心的役割を担った。

しかしながら、十四世紀ぐらいから急速に戦闘方法が変わったこと、またその他の戦士身分が力をつけてきたことによって、今度はじわじわとその有効性を失うようになり、やがて中世の終末とともに「騎士道」という観念のみを残して特異な身分としての騎士は崩壊した。

騎士道精神の継承

次に騎士道の問題を時代や地域を超えて考えてみよう。

この騎士たちの行ないを見ると、共通の面白い事実に気づく。すなわち騎士たちが日頃行なっている戦闘準備、戦闘訓練などはしばしば狩猟（ハンティング）を土台として考えられているということだ。事実、この中世の封建軍隊が戦争を行なう時期は、春の一か月と秋から冬にかけての一か月間のあわせてほぼ二か月程度だ。

現在の私たちから見れば常識はずれだと思われるが、戦闘はいわば狩猟であって、一年中行なうものではないと考えられていたのである。

このような狩猟の原則と言われるものは、ヨーロッパ社会の間で、長らく維持されてきた。私たちが通常考えているように、主君の利益を守護するという理由だけで戦争が行なわれたわけではなく、一種のスポーツ感覚だったのではなかろうか。

しかも、この騎士たちは領民の生活を安定させ、領地の秩序を維持するという牧民者の役割も担っていた。ヨーロッパの騎士は領民を搾取の対象としてしか見ていなかったという議論もあるが、それだけで領地経営がうまくゆくわけはない。

この騎士たちの主君に対する奉仕義務は戦争の期間ばかりではなかった。戦争はいつもあるとは限らないし、戦争は戦場に出て、現実に武器を取るだけではない。多くの場合、三月末もしくは四月初めに、これらの騎士たちは、主君の宮廷に徴集されて、戦闘の計画や作戦を練る戦闘顧問官としてその重要な役割を果たした。しかも、それはしばしば戦闘任務とは離れたエキストラ・ワークであって、主君の宮廷や城館に侍ることで達成されていた。

通常、私たちが騎士道と呼んでいる多くのものは、この宮廷を通して定着した。宮廷の誕生によって、単なる一身分に過ぎなかった騎士が急速にそれを取り巻くほかの身分にも受け入れられ、ついには国王さえも「神の騎士」と自称するところまで広がっていった。

それを考えると宮廷が果たした役割はきわめて重要である。

ところが、十四世紀を過ぎると、国王の直属戦士や有能な傭兵に軍隊が編成され直され、騎士の社会的な存在は急速に失われていった。それにもかかわらず、騎士道は十六世紀以後の近世社会のなかにまで形を変えて受け継がれていったし、騎士道と呼ばれるもののいくつかは、現代の市民社会の道徳のなかにすら、多様な形をとって存在している。

さて、ヨーロッパの騎士道は幾世紀にもわたって、社会的に共有された価値観念の一つとして継承されてきているが、果たしてわが国では武士道の精神は受け継がれてきているのだろうか。

ヨーロッパ社会では没落しつつあると言いながらも貴族が現実に存在し、市民革命以後もある種の社会的な役割を果たし、騎士道精神を市民社会に提供し続けてきた。

わが国では、江戸時代に二百六十いくつかの諸侯たちがいたにもかかわらず、武士道の精神を守り続けてこなかったのではないか。その結果、私たちは武士道を言葉の上だけで理解し、社会の上層から下層まで広く共有されていた、説得力のある武士道精神を急速に失ってしまって「総中流化」してしまったのではなかろうか。

（文責・編集者）

第157回 大学共同セミナー

＝主題＝ サムライ・ニッポン ――日本人再考――

期　日
'91.12.7～8

▼ゲスト講演1
騎士道をめぐって
東京大学文学部教授　樺山紘一氏

▼ゲスト講演2
日本映画と時代劇――侍像の変遷――
映画史家　冨士田元彦氏

▼シンポジウム
1　兵の道（つわもののみち）――初期の武士団――
帝京大学文学部教授　阿部　猛氏
2　戦国武士道と乱世の論理
静岡大学教育学部教授　小和田哲男氏
3　江戸時代の武士の実像
東京大学史料編纂所助手　山本博文氏
4　対応の原点としての〝武〟
武術稽古研究会松聲館主宰　甲野善紀氏

【運営委員】
学習院大学文学部教授　福井憲彦氏
日本女子大学文学部教授　西村圭子氏
東京大学文学部教授　川端香男里氏
東京経済大学経済学部教授　桜井哲夫氏

【参加学生】 36名（内男16名・女20名）
日本女子（6）、明治（4）、東京・早稲田（各3）、お茶の水女子・東京女子・明治学院・東京経済（各2）、筑波・埼玉・東京都立・日本・成城・杏林（各1）、その他（6）、以上14校

◆

世界が大変動を経験しつつある現在、日本はどのような位置を占め、どのような役割を果たすことができるのだろうか。いまの大学生が社会に出て活躍する近い将来には、日本文化や日本人の生き方が、ますます世界のなかで問われるようになることだろう。

現在、外国から日本を見たとき、経済大国のイメージが強くなっているが、他方、日本のビジネスマンを集団主義や組織への忠誠心と結びつけて「サムライ」や「戦士」という言葉でイメージする感覚も内外に存在している。また実は日本社会のなかにも、忠臣蔵や宮本武蔵などの剣術家、あるいは戦国武将などを通じて「サムライ」や「武」に対する関心に根強いものがある。

このセミナーが開催される十二月八日は、あの真珠湾攻撃から五十周年である。「武」は、しばしば大日本帝国の蛮挙の責任や封建主義とのみ結びつけられてきたが、「武」や「剣」における心身の捉え方のなかには、この大変動の現代において再考すべき数々のヒントが内在していそうである。なにも外国からの「サムライ・ニッポン」イメージがあるからではなく、「サムライ」を考えることは日本文化を考え、日本人を考える重要な切り口の一つでもありうる。

日本人論や日本文化論に関心がある人、日本史に関心がある人、武術に関心のある人、また人間の身体性や「生と死」に興味のある人が、さまざまな観点からサムライと日本人について考えるための共通の舞台となることが今回のセミナーの主旨である。

◆

プログラムは近世以前の武士像をめぐるシンポジウムから開始された。

まず荘園史がご専門の**阿部氏**が、武士の成り立ちについて『今昔物語集』などの史料に即しながら説明された。武士は、貴族の下で殺生を「役」つまり仕事とする「兵（つわもの）」として誕生した。兵の条件は今昔物語に「心太く、手きき、足早く、強力で、思量ふかい」人物とあるように、勇猛で武芸、殊に弓と太刀に優れていることであった。

国司地方官を歴任する中流貴族（受領（ずりょう））は常にこうした兵（郎等（ろうどう））を養っており、この武力を背景として徴税していた。武士は荘園の管理人や国衙、鎌倉の御家人となるなど公権力とつながることで、その存在を正当化していたのである。

続いて、戦国期を中心に幅広い著作のある**小和田氏**は、応仁の乱から豊臣秀吉による天下統一に至る戦国時代の武士道の特徴は「強い者への傾斜」であった、と近世武士道との違いを指摘された。

戦国武士道が生まれてくる背景には、乱世の論理があった。その特徴を列挙すれば――「下剋上」という言葉に象徴されるような身分の逆転を肯定する考え方。親の七光的な世襲の論理を排し、いわゆる「器量」や「能」を重視する実力主義。近世武士道の論理である「二君にまみえず」ではなく、主君は上から決められるのではなく自らが決めるという考え方。主君と家臣の合議が多いことや諫言の多さにも見られるように、君と臣の垣根が低いこと。「名を惜しむ」、「名をあげる」などの言葉に見られるように名誉にこだわったこと、などが戦国武士道の背景にあった。

阿部、小和田両氏の発題の後、ティータイムを挟んで、西洋史がご専門の**樺山氏**がヨーロッパ史上の概念である「騎士」についてサムライと対比させながら講演された（2～3頁の要約参照）。

◆

夕食後のゲスト講演2では、日本の映画史、時代劇について数多くの著作のあ

る**冨士田氏**が「日本映画と時代劇――侍像の変遷」と題し、貴重な映像を駆使しながら映画やテレビ映像のなかに表れたサムライ像をめぐって講演された。

氏によれば、最近のテレビ時代劇では、銭形平次、遠山の金さん、水戸黄門などそれぞれ江戸の岡っ引き、町奉行、それに天下の副将軍といった立場の違いはあれ、ともかく権力機構につらなっている主人公が多いという。

これは、昭和二十年代末から三十年代半ばにかけて全盛を誇った、いわゆる東映時代劇のパターンをそのまま受け継いでいるものといってよい。彼らは時の体制や秩序を守るために活躍する。そこでは、少しでも秩序を乱そうとするもの、権力に弓を引こうとするものが悪人とされる。そこに、戦後のテレビや映画の時代劇と戦前との際だつ対照的な性格がある。

サムライ・ニッポンに参加して――初冬の野外ステージにて

いきおい、こうした構図からアンチ権力的なヒーローははじき出される。その代表的な例は国定忠次だろう。忠次ほど、戦前には繰り返しスクリーンの上に登場した主役でありながら、戦後にはすっかり脇役の位置に退いてしまった英雄はいない。高度経済成長には背を向けた、およそ戦後的ではない性格である。

代わりに清水の次郎長がのしあがってくる。次郎長ものは、清水港の米屋の倅に生まれた青年が、やくざの世界に身を投じて一家を成し、やがて東海一の大親分に成長していく話であるが、この方が、高度成長、経済大国の戦後日本にふさわしい。忠次から次郎長へ、その主役の交代は、戦前と戦後の時代劇の質の変化を象徴している、と講演された。

◆

2日目は、戦国武士道をめぐる小和田氏の発題を受けて、近世半ば以降の、現代のサラリーマンに擬られる「封建官僚」としての武士像をめぐって**山本氏**が講演された。

まず氏は、しばしば武士と侍は同じものであるかのように考えられているが、身分階層によってその姿は多様であることを指摘された。戦のとき騎馬武者に何人もの奉公人がいたように、武家には武士のほかに、中間、小者など武家奉公人といわれる人達が仕えていた。武士のなかでも若党といわれる人達がいわゆる侍であり、中間、小者などからも侍に取り立てられることもあった。だから秀吉の頃出された身分統制令で身分の固定化が図られたといっても厳格なものではなかった。

戦国武士と違って、この時代の武士は主君から知行をいただいているから恩を感じるという冷めた関係に変わる。また朱子学の影響もあって職務に責任を感じるといういわば官僚的な思考となった。武装自弁の戦闘者であることに自らのアイデンティティを求めてきたが、同時に泰平の世の治者でなくてはならないという二律背反を抱えた武士の苦渋が『葉隠』や『武道初心集』に表わされた。

続いて、様々な武術を渉猟されてきた**甲野氏**が、これまでのサムライをめぐる歴史的な視点を離れて人間存在のあり方の問題に引きつけて、実際に術技を交えながら講演を行なった。

対応の原点としての“武”――からだの質的な転換とは

氏は、まず近年しばしば発生する学校体育会のリンチ事件を嘆かれ、こうした武道を教える場の欠陥を二つほど指摘された。

一つは偏った精神主義である。体育会の稽古では様々な我慢が強制されるが、我慢は武術を究めるうえで必要な感性を鈍らせるだけだ。

もう一つは、「根性、根性。ファイト、ファイト」でおしまくるいわゆる「スポ根主義」である。同じ動作を反復させるノルマ主義は単なる筋力増強に過ぎず、これまた武術を究めるうえで必要な、からだの動かし方の質的な転換がはかれなくなってしまう。

氏は杖（じょう）や真剣などを使って「水鳥の足」と呼ぶよどみない動作や相手とのやり取りなど、からだの質的な転換とはどういうものかを実演された。素人には驚嘆に価するものばかりであった。

こうした精妙な武術の動きは、ノルマを強制する稽古法や、単なる反復稽古では決して育つものではない。技の向上は、いかにセンスを磨くかにあり、それは各人の自発性を尊重しながら、各人の感性を磨き抜く稽古法でしか得られない。

個人の特性を最大限に引き出すことが目的の武術と、個人を一個の部品として命令に従順になることを訓練する軍隊とは本来まったく違うものである。

一人ひとりの意欲を引き出し、自発性によって自己の感性を磨き抜く稽古法は、同時に誰にも束縛されず、しかも自

分で最後まで責任をもつ、自立した考えと行動のできる人間を育てるための多くの優れた面を持っている。

日本における〝武〟とは突き詰めれば「自分にとって、より深く、より納得のできる人との対応ができるか」という対応の原点であり、これは命のやり取りという極限的なものから、ごく日常の対人関係に至るすべての場においていえることである。

◆

最後に、二日間にわたって議論してきたことを踏まえて行なわれた討論のなかから、いくつか発言を拾って紹介しておきたい。

日本人は自分の共同体で恥をかくことを極端に嫌がるが、それを回避する方法が、例えば武士にとっては『葉隠』に代表される武士道だったのではないか、という意見が出た。これに対して、では武士道に立脚した生き方とはどういうものか。新渡戸稲造は『武士道』のなかで我慢や名誉などを説いているが、甲野氏は体感を通して自分の意見を持っていること、そして自分の意見が言えることだと主張された。

武士道に立脚した生き方とは

外国人に日本語を教えている社会人参加者からは、「切腹とは何か」、「自殺するときなぜ腹を切るのか」という外国人の疑問にどう答えればよいのかという質問があった。これに対しては、「日本では腹を切るのは儀式であり、儀式の手順を経ることで自分の意思を示し、あくまで衝動的でないということを示すためである」、「喉を突くことは衝動でもできるが、腹に短刀を一旦突き立て、さらにえぐるのにはかなりの意思力が必要であり、それを示すためである」との応答があった。

また殉死については、主君がなくなっても譜代の家老クラスは自害しない。するのは主君によって大いに取り立てられた人間か、男色関係にあった人間だけである。こうした人間は周りから主君と死を同じくするよう強制されるし、また江戸期にはいると家は安泰だから、自分の忠義の示しどころがなく、それを示すために殉死するという傾向があったのではないか、という発言もあった。

「〝日本人ってなんなの〟と尋ねられたときに戦前ならば軍刀を出せばそれで済んだかもしれないが、今は何があるのか」という質問が出された。それに対しては、日本人のアイデンティティをそのように単純化してしまうことは危険である。これからは日本人であることにこだわらず、個人としての意見をしっかりと持つことの方が大切ではないかという意見が出された。

一泊二日にわたる短い討論ではあったが、国際社会のなかで自らのイメージを積極的に伝える必要がある今日、サムライ・イメージを一つの切り口として、常に自分像を内省していくことの必要性が痛感させられたセミナーであった。

最後になったが、このセミナーの企画運営にご尽力いただいた福井、西村、川端、桜井の各運営委員はじめ、師走のお忙しい時期にもかかわらず、熱心にご指導いただいた樺山、冨士田、阿部、小和田、山本、甲野の六氏、また直前に腰痛でご参画いただけなかった氏家幹人氏に対してここに改めて謝意を表したい。

参加学生の感想から

歴史・サムライ
——自分のこととして思うこと

成城大学経済学部4年　市原　孝

自発的にこのセミナーに参加したメンバーの積極的な姿勢に接して、自発的に行動することの大切さを思い知らされた。何かを得ようとするセミナー全体の雰囲気がとても心地良かった。いつまでも夕焼けにみとれているわけにはいかないと思った。

サムライ・ニッポンというテーマをめぐる講演と議論とは、自分を見つめ直す一つのきっかけになった。日本人は、諸外国の日本への認識の程度の低さにあきれることが多いが、自分自身の認識の程度がどれほどかを疑う人は少ない。いつの頃からか封印してしまった、自分の国の歴史を認識する力を思い出さなくては、いつになっても日本と日本で生きる自分自身とを正確に理解することはできないだろう。単に歴史を否定する進歩主義も、単に歴史に固執する伝統主義も、どちらも歴史の前では何の意味もない。その時代に生き、その時代に死に、そうして確かな生活を重ねてきた人々の姿には誰でもひかれるものがある。幸い、史料は残っている。会おうと思えば、全力で生き、全力で死んでいったあの時代の人々に会うこともできる。ふと幼い頃の自分が眼に浮ぶという誰でも日常経験することと、これは異なる行為ではない。ただ遡る時間の長さが違うだけだ。そうすれば、自分の過去が他人事でないように、サムライの時代も他人事ではなくなるだろう。他人事でなくなれば、活かそうと思わなくても歴史は現在に活きてくる。気づいてみればあたり前のことで、セミナーに参加しながらそんなことを考えていた。

歴史は流れるのだろうか。それは流れ去るものではなく、そこに在り続けるものだと思いたい。消えてしまうとすれば、それは、誰一人、それを思い出そうとする人がいなくなった時だろう。だからこそ、歴史は正確に認識されなくては意味がない。しかし、正確なだけでは十分ではない。死体を解剖しても生きた人間のことはわからないという言葉は、歴史についてもあてはまるようだ。

あと一日あれば、もっと話ができたのにと思い、解散する時は名残惜しかった。一泊二日という短い期間ではあったが、参加できて本当によかった。運営者の方々の好意と参加者の方々の熱意とが相俟ってサムライ・ニッポンというセミナーの印象は、あの日の夕暮れと同様に忘れ難く暖かいものとして心に残っている。

平成3年度 常務理事・運営委員会合同会議

'92年1月24日／本郷・学士会館

［出席者］
（常務理事）三宅彰・鈴木皇・宇野重昭
（運営委員）井早康正・山本和代・三輪公忠・示村悦二郎・川端香男里・宇佐美滋（敬称略）
（法人）中川理事長・岡館長・小岩専務理事

中川理事長が議長となり報告と協議が行なわれた。先ず協議に先立って専務理事から資料に基づいて過去三年間に亙る全般的な業務状況についての報告があった後、以下の通り協議が行なわれた。

▽利用料金の値上げについて

宿泊利用料金の改定では、学生については一律三〇〇円、教職員・社会人については一律四〇〇円の値上げとする案がまとまった。

▽職員の定年延長について

現行の定年は満62歳と定められ運用されているが、職員の福利厚生、人材確保の観点から定年を65歳に延長したいとの理事長提案がなされた。事柄を整理した上で次の理事会に付議されることになった。

▽大学共同セミナーへの社会人の参加促進について

岡館長から詳細説明の後、差し当たり共同セミナー委員会において検討を加えてみることになった。

▽施設の老朽化対策について

専務理事から過去三年に亙る修繕費と施設整備費の支出状況について説明があった後、これ以上、老朽化している施設に限度を越えて修繕費を投下しても効果のない支出になってしまうので、早急に抜本的対策が講じられるべきとの結論になった。

平成3年度 第2回共同セミナー委員会

'91年12月17日／アルカディア市ヶ谷

［出席者］川端香男里、桜井哲夫、西村圭子、野崎昭弘、福井憲彦、江橋　崇（敬称略）

〈セミナー・ハウスより〉

岡館長、小岩専務理事、他2名

第2回委員会は別記の6名の委員が出席し、主に以下の通り議事が行なわれた。

(1)第11回大学院共同セミナー「市場経済のパラドックス―新しい経済学の可能性―」、第156回大学共同セミナー「世紀末、甦るアリス」、第157回大学共同セミナー「サムライ・ニッポン―日本人再考―」の実施報告。

(2)平成4年度教育プログラムについて

①前回に提案されていた「江戸」及び「コロンブス・アメリカ大陸〈発見〉五百年」は、どちらも選出された委員の都合が悪く、実施を見送る。

②第13回大学合同セミナー（平成5年3月19～21日）は、小川捷之委員を運営委員に大学院レベルで〈臨床心理学〉の分野をテーマに開催する。

③第158回大学共同セミナー（平成4年6月19～21日）は、外国人労働者問題を手がかりにして〈異文化共存〉のあり方などをめぐって、江橋、小西、間宮の各委員を運営委員に開催する。

④第159回大学共同セミナー（7月3～5日）は、〈生命科学〉をテーマに中村、野崎の両委員を運営委員に開催する（都合によりこのテーマは次年度に先送りとなった。替わりに数学をテーマに開催することとなった）。

⑤第160回大学共同セミナー（11月13～15日）は、〈身体論〉をテーマに桜井委員と、先の第157回大学共同セミナー「サムライ・ニッポン」の講師であった甲野善紀氏を運営委員に開催する。

平成3年度 FDプログラム小委員会

〈第1回〉 '91年4月16日／青学会館

［出席者］示村悦二郎、中島利誠、福田一郎、中田良平、山内正平、鈴木正男、岡館長

①『大学教員研修マニュアル2』の編集経過について②平成2年度大学教育方法等改善経費の実績報告③FDプログラム小委員の補充（原　一雄・国際基督教大学教養学部教授）④第3回FDプログラムの企画について／今回は過去2回の経験を踏まえて、より大学教育の現場に密着した研修にする⑤平成3年度大学教育方法等改善経費の概要及び実施計画について／今年度はお茶の水女子大学から改善経費を要求してもらう／マサチューセッツ工科大学の『教師と学生』に比すべき日本版の教員研修マニュアルを作成する／教材として授業をビデオに収録する／『マニュアル〈2〉』の文献目録中の文献の収集など。

〈第2回〉 '91年5月21日／青学会館

［出席者］示村悦二郎、中島利誠、山内正平、鈴木正男、原　一雄、蠟山道雄、岡館長

①マサチューセッツ工科大学『教師と学生』の読み合わせとセミナー・ハウス版『教師と学生』の内容の検討②教材ビデオの製作について協議。

〈第3回〉 '91年7月1日／アルカディア市ヶ谷

［出席者］示村悦二郎、原科幸彦、中島利誠、福田一郎、山内正平、鈴木正男、原　一雄、蠟山道雄、岡館長

『FDハンドブック』（大学教員研修マニュアルの仮称）の内容と執筆分担を検討する。

（8頁4段目につづく）

千人会

'91年12月～
'92年2月

◇現在会員　一、四六一名（実会員数）
（通算入会者一、八四〇名）

◇新しく会員となられた方々

B　主婦　佐藤　玉枝殿
B　文京区立教育センター　新城　信枝殿

大学教育の問題点をセミナー・ハウスの活動の意義を岡館長から伺い感銘を受け、私共もそのお手伝いの一端にと…（以下略）

A　イオナインターナショナル㈱代表取締役　川崎　節生殿
A　主婦　川崎　智永殿

◇会費ありがとうございます。

末永国明、茂木誠陸、笹島恒輔、内藤正、慶伊富長、大谷禎之介、鈴木守、有山正孝、宮本勉、岡田正弘、佐藤方哉、山下幸夫、竹内啓一、清水誠、小西正捷、山田晫、茅伊登子、池田貞雄、池田温、来住正三、平松幸一、金台然、伊藤修一、隈部直光、浜川祥枝、岡崎正一、住田友文、村上健、杉山好、中野工、納富照枝、速水佑次郎、池上秋彦、宮川松男、浮田久子、西田亀久夫、三浦安子、茂木利一、塚本利明、黒田成俊、杉山吉茂、三浦永光、福原満洲雄、青柳総太郎、森久、平野健一郎、澤孝一郎、天野成光、水野悦子、横沼健雄、川端香男里、甲斐隆、上田明子、合田信子、西川道治、森山俊雄、川鍋正敏、山田圭一、半谷高久、有馬弥子、桑原哲郎、猪瀬博、清水啓三郎、師岡孝次、斎藤耕二、佐藤進、田原勘意、平木典子、大塩俊介、小菅敏夫、小山弘志、後藤聰一、山口桂子、石井素介、高橋恒郎、飛田茂雄、鈴木皇、江幡玲子、川崎正三、笠井貴征、一番ヶ瀬康子、武田昌輔、石井明、上山碩、磯村英一、鈴木博、園田義道、渡辺忠胤、青井和夫、伊藤洋、大川信明、竹林代嘉、柳沢富雄、慶谷壽信、武藤義夫、中富光国、深沢実、乾崇夫、茅野良男、高村新一、田中英夫、河田敬義、浦上ルイ子、佐々木良一、小谷正雄、新井明、司馬正次、田中国昭、栗田寛一、上谷琢之、志鳥学修、根岸愛子、加倉井茂樹、大羽滋、小林清子、小川政亮、中利太郎、佐藤音彦、田島信元、高橋昭三、東川清一、石川道夫、大森東亜、谷口修一、大口勇次郎、小俣武夫、深山和子、富沢賢治、篠寄啓助、増田義男、池井優、関口晃、萩原玉味、京極純一、小川洋輔、小野寺嘉孝、松原元一、北村嘉行、藤巻正生、岩佐凱實、谷資信、金子ハルオ、吉田公保、磯野修、清水畏三、石井正博、東洋、平岡伊佐武、吉川孔敏、都留春夫、油井大三郎、山崎俊雄、守永誠治、山口俊夫、柳父圀近、遠藤平治、一丸節夫、本田和子、石堂常世、高階秀爾、古田勝久、松山正男、森昭彦、寺東寛治、牧野誠一、飯尾右一、新澤雄一、増沢利幸、三神勲、新保清子、佐久間純郎、磯直道、大野京子、高橋和之、崎野滋樹、泉敏彦、笠耐、馬越徹、島美喜子、佐藤美喜子、吉田宏哲、佐藤百世、富塚文太郎、小林哲也、中村妙子、渡辺武雄、箱木真澄、本間仁、井原恵治、久保亮五、高松正昭、大岡信、斎藤眞、福永寿巳夫、藤井良治、昌谷春海、中岡二郎、喜多村得也、箕輪成男、西田貴子　（敬称略）

◆千人会員からのたより

間もなく湾岸アラビアの発掘に出ます。よいお年をお迎え下さい。

立教大学教授　小西正捷

◇

本年十月、三年間のローマ日本文化会館館長の任をおえ、一橋大学教授に復職しました。

竹内啓一

◇

あい変わらず、貧者の一燈を献じます。学校の催しの関係で、またうかがう機会がふえたことをうれしく思っています。

恵泉女学園大学教授　杉山　好

◇

来年四月からは、セミナー・ハウスの直ぐ近くに転居する予定です。五月には、フレッシュマン・キャンプで、またお世話になります。

津田塾大学助教授　村上　健

◇

毎年四月にお世話になっています。普通の宿泊施設とは違うものを学生に伝えることができればと考えて指導しております。

明治大学教授　森　久

◇

カードをありがとうございました。大学の組織もかわり、学生もかわって行くことでしょう。御発展をお祈り申し上げます。

津田塾大学教授　上田明子

◇

新春にお目にかかれる日を楽しみにしております。サウジアラビアから帰って参りました。

東海大学教授　師岡孝次

◇

大学を退職致しましたが、今年はまたA会員の会費を送ることが出来感謝にたえません。

大川信明

◇

拝復　この三月末二回目の定年を迎えますが、四月からは予ねて念願としていた研究に年齢相応に集中する予定です。岡先生のお元気さにも懐しく倣うようにいたします。

上武大学教授　関口　晃

◇

いつも館長ご達筆であいさつ頂き恐縮しております。

国際基督教大学客員教授　斎藤　眞

寄贈図書

'91年9月～
'92年2月

『子どもの心がわかる養護教諭に』鳴澤　實殿
『Marx's Capital and One Free World』堀江忠男殿
『アーナンディー』　大同生命国際文化基金殿
『ロシアーその民族とこころ』　川端香男里殿
『地球を救え』　清水建設株式会社殿

寄付金報告

'91年12月～
'92年2月

〈一般寄附金〉
一〇、〇〇〇円　順天堂大学医学部　P3クラスセミナー殿

（7頁よりつづく）

〈第4回〉'91年8月10日／大学セミナー・ハウス
［出席者］示村悦二郎、原科幸彦、中島利誠、福田一郎、中田良平、山内正平、鈴木正男、原　一雄、蠟山道雄、岡館長
①平成3年度大学教育方法等改善経費について／改善経費は百二十二万七千円に決定し、新たにコンピュータの借り上げ、アルバイトの謝金の計上が可能となった②第3回FDセミナーの企画の検討③ビデオ「大学の講義」（サンノゼ州立大学）の鑑賞④『FDハンドブック』の原稿の読み合わせと内容の検討。

〈第5回〉'91年10月20日／大学セミナー・ハウス
［出席者］示村悦二郎、原科幸彦、坂井昭宏、中島利誠、福田一郎、中田良平、鈴木正男、蠟山道雄、岡館長
①『FDハンドブック』の第2稿の検討、②第3回FDセミナーの企画の検討―プログラム原案を練り直し、講師、主旨文を検討。

〈第6回〉'91年2月5日／青学会館
［出席者］示村悦二郎、原科幸彦、中島利誠、福田一郎、中田良平、原　一雄、蠟山道雄、岡館長
①第3回大学教員研修プログラムの実施報告②大学教育方法等改善経費の実績報告③平成4年度大学教員研修プログラムについて／初級者コースと上級者コースに分けて年2回開催する方向で検討する④大学教育方法等改善経費の要求について／次年度の要求書は電気通信大学（担当・中田委員）から提出する⑤時期小委員会の人事について。

業／務／通／信

'91年12月、'92年1・2月 冬季3ヵ月の合宿研修から

冬季3ヵ月、寒気にめげずこの丘で合宿研修に打ち込んだ人々八、四五九人（二一八グループ）。その研修風景の中から、いくつかの話題をお届けしたい。

●年末25年目の卒論合宿

毎年12月は、「冬休み開始の前後」と決めて利用される常連グループを迎える。卒業研究発表が多く、春の卒業を前に、教師と学生の交わりは学問的にも人間的にも一層深まる。本号の〈わたしたちの合宿〉には、早稲田大学商学部の**染谷恭次郎ゼミ**にご登場いただいた。染谷教授が当ハウスで初めて卒論合宿を実施されたのは'67年であるから、この冬で25年目という伝統の合宿である。

武蔵工大「留学生研修会」に参加した5ヵ国21名の留学生と日本人職員の方々——大セミナー室の屋上で（'91. 12. 1）

●各国の留学生の来泊

海外からの留学生を含むグループの合宿が増えている。この丘にまだ紅葉が残る12月はじめ、武蔵工業大学主催の**留学生研修会**が行なわれ、韓国、中国、台湾、タイ、アルジェリアなどの留学生21名が職員の方々7名と研修（履修、入管手続、日本での学生生活など）と懇親の1泊2日をすごし（**上掲写真**）、帰途には高尾山へのハイキングを楽しんだ。

東京都立大学国文学科・**中本正智ゼミ**の合宿には、この冬も留学生の参加が多かった。学生13名のうち、韓国と中国からの院生・研究生が6名。全員が流暢な日本語を話し、そこに国籍の違いは感じられない。この合宿の交流の様子などを中国からの石川（せきせん）さんがご紹介下さった（10頁〈私の国際交流〉）。

●盛んな大学連合の集会

12月の二つの週末、大学の枠を越えた学生の大型集会が、ともに2泊3日で展開された。一つは社会学合同セミナー。当ハウス主催のプログラムから自主ゼミとして独立して9年、通算で12回目を迎え、左記3大学4ゼミの一二二名がそれぞれの研究の成果を持ち寄った。慶応大学**山岸健ゼミ**（都市論・新宿）、法政大学**田中義久ゼミ**（社会関係としての〈祭り〉）、東京国際大学**小川文弥ゼミⅢ**（大学生の実態—社会的評価への回答）・**同**

わたしたちの合宿

私たちのホーム・グラウンド

早稲田大学教授　**染谷恭次郎**

私のゼミナールでは、会計学、そのうち特に財務会計を中心に学んでいる。ゼミでは論文を書き、口述発表することに重点を置いている。「書く」と「話す」は自分の意思を他人に伝える手段であり、現代社会に生きる人々にとって欠かせない。また、青春時代の一時期を同じゼミで過ごすこととなった人々との出会いを大切にし、生涯の友を見出すことに、学ぶことと同様の意義が与えられるからだ。

合宿して行なう研究発表はキャンパスのなかでは経験できなかったほどの緊張感が漲り、論文の書き方を学び、口述発表を訓練するうえで、またとない方法である。また寝食をともにし、学問を、そして人生を語り合うなかで、お互いの理解が深められ、親近感が増していく。

私のゼミの合宿がいつ頃から始められたか定かでない。卒業生の〝追い出し旅行〟などはほぼゼミの開設当初から行なわれていたが、研究発表のための合宿が行なわれるようになったのは、もう少しあとであったかと思う。はじめは、あちこち、ひなびた温泉宿をさがし、転々と場所を変えて行なっていただけに、大学セミナー・ハウスが誕生したことはありがたく、早速、ここを私たちのホーム・グラウンドにした。合宿は毎年十二月に行なっており、研究発表を終えた最後の時間には反省会を持つ。私はここで社会に巣立つ人々に訣別の言葉を送る。こうした合宿のパターンもほぼ定着した。

セミナー・ハウスの開設につくされた飯田宗一郎氏には大変感謝している。あと二年、私が大学を定年退職するまで、私たちのゼミは大学セミナー・ハウスをホームグラウンドにしていきたい。

卒業研究発表を終えて——染谷恭次郎教授（前列中央）と学生たち。2年間のゼミ活動で親近感が一番深められる時である（'91. 12. 18）

セミナーハウスでの思い出

染谷ゼミ4年　**平井　勝己**

毎年12月に行なわれるこの合宿をもって、我々染谷ゼミナールの一年の活動が終了する。私にとって、それは同時に二年間のゼミ活動に幕が閉じられることを意味している。よって、この合宿に臨む私の意気込みはまたひとしおであった。都心の大学では味わうことのできない素晴らしい環境の中で、私はあらためて先生の生徒に対する優しさを感じ、また、友との友情を深めることができた。この思い出は、いつまでも私の心に残ることであろう。

ゼミI（結婚率の低下）。

もう一つは**国際学生シンポジウム**。当ハウスでは初めての開催であるが、'79年以来通算13回目という実績をもつ学生主体のプログラムである。今回の参加者は全国46大学からの二九〇名。総合テーマは「戦争と平和」。湾岸戦争後、折から議論が高まる日本の国際貢献策などについて、若者の熱気ある討論が繰り広げられた（**11頁に写真**）。

●常連ゼミ教授の最終合宿

開館して四半世紀がすぎると、その当時の学生はいま中堅となり、教師の中には定年を迎える方が増える。合宿の主役にも次第に世代の交替が見え始める。

12月はじめ、19人の学生を連れて合宿された日本女子大学英文学科の**島田法子講師**は、開館記念の第1回大学共同セミナーの参加学生だった。そして、その当時セミナーの講師や共同セミナー委員会の委員長を務められた早稲田大学文学部の**川原栄峰教授**は、この春定年を迎えられた。12月末の大学院生との最終合宿は通算で61回目。「今回の参加者のうち7人が教師として活躍中です。今度は彼らが学生を連れて来ます」。川原教授がこの丘に据えられた合宿は〝二世〟たちによって引き継がれていく。

東京大学美術史科の**高階秀爾ゼミ**も2月はじめに最終合宿を迎えた（**写真上掲**）。'79年以来、毎年この時期に1年間のゼミの総仕上げの合宿を行なって通算で13回目。高階教授はこのほか、美術史の日米大学院会議、そして共同セミナーの講師も務められた。この合宿も、後継者諸氏によって続けられると伺っている。川原、高階両先生の長年のご利用とご支援に感謝し、これからもまた新しいグループを連れて来泊されるよう、心よりお待ち申し上げたい。

最終合宿〈その1〉**東大美術史学科・高階秀爾教授**（前列中央）（'92. 2. 3）

最終合宿〈その2〉**早大文学部川原栄峰教授**—岡宏子館長とセミナー室にて（'91. 12. 22）

Thank you very much for all your assistance during CIEE's stay at the Inter-University Seminar House last week. Our orientation went very well and the combination of the tranquil setting and excellent accommodations certainly were factors in its success.

Steven Muraski, Resident Director
Japanese Business & Society Program, CIEE.
(January 29 —February 1 , 1992)

国際教育交換協議会主催「日本経済経営セミナー」のレジデント・ディレクターからのメッセージ

私の国際交流

切磋琢磨、触れ合いの場

——大学セミナー・ハウス

東京都立大学人文科学研究科国文学専攻博士課程
石川（せき・せん）

北京で日本語を勉強しましたが、もっと日本という国を知りたいというのが私の日本留学のきっかけでした。いまは東京都立大学の中本先生のもとで日本語と中国語の対照研究をしていますが、初めて大学セミナー・ハウスで合宿を体験したのは一九九〇年一月のことでした。そして、二年経った今久しぶりに再訪することになりました。

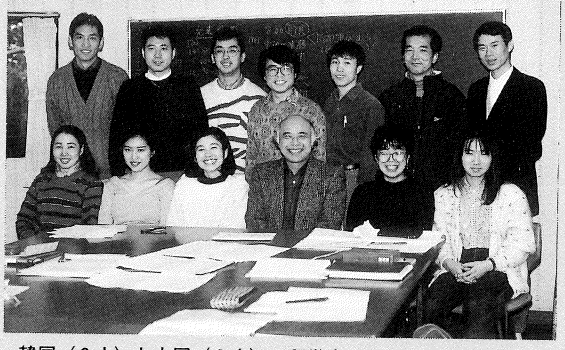
中国では、日本のように合宿をすることがないので、大学以外の場所で授業と一味違う勉強ができる合宿は、留学生としての私にとっては実に新鮮な体験です。

豊かな自然に囲まれる環境の中で、日本人学生に交わって、韓国や中国の留学生も次々とゼミで発表をし、普段の授業では十分に意見交換のできない各自の研究について、真剣に討議をし、いままで個人個人の研究では得られなかった新しい見解や結果が見いだされ、ゼミ参加者全員にとって、極めて収穫の多いセミナーとなりました。

また、二年前の合宿の時の懐かしい思い出ですが、その頃私は「日中両語の擬声語についての対照研究」という修士論文を執筆する大変な時期で頑張って良い論文を出そうと、合宿の間、昼間のゼミの合間や夜就寝前の時間を利用して、中本先生や先輩達に私の論文についてのアドバイスやご指導をして頂きました。お陰様で、今年無事修士論文を提出し、修士課程を修了できました。そのためか、セミナー・ハウスは私の留学生活とは切り離せない関係にあり、感謝の気持ちで一杯です。

都会の雑踏から離れて、静かな環境の中で、学問についての切磋琢磨と人と人との触れ合いができるのは大学セミナー・ハウスの良さの一つだと思います。

大学セミナー・ハウスでの短い合宿が終わりましたが、その勉学の良い雰囲気を求めて、いつか、私はまた来ると思います。



韓国（3人）と中国（3人）の留学生が日本人学生に混って
——前列中央が中本正智教授，後列左端が筆者の石川さん（'92. 1. 18）

利用状況

＊＝同月2回利用
＊＊＝同月3回利用
日帰りを除く

■**12月**（103グループ、延三、五一一人）

明治学院大学教授＊＊　増田　茂樹
武蔵工業大学留学生研修会
東京都立大学生物学ゼミ1・2年
東京都立大学生物学ゼミ3・4年
中央大学教授＊　石川　晃弘
日本女子大学講師　島田　法子
一橋大学教授　関　啓子
東京大学助教授　島薗　進
法政大学教授　平林　千牧
日本大学講師　松本　幸一
中央大学講師　黒田　俊郎
中央大学教授　田中　拓男
国際基督教大学助手　畏岩　秀章
国際基督教大学〝自分らしさへの試み〟
国際基督教大学準教授　姜　尚中
東京都立大学教授　二村　敏子
学習院大学教授　坂本多加雄
筑波大学講師　森　政稔
東京電機大学教授　八木澤壮一
明治大学教授　長尾　史郎
東京大学助教授　馬場　哲
明治大学講師　矢野　篤
成蹊大学教授　宇野　重昭
中央大学教授　下村　康正
慶応義塾大学有賀・増田研究室
中央大学教授　五井　一雄
東京都立大学教授　大塚啓二郎
電気通信大学教授　荻原洋太郎
東京都立大学教授　山住　正己
日本大学教授　菊池　敏夫
明治学院大学助手　有馬　賢治
中央大学教授　村田　稔
東京外国語大学教授　若林　俊輔
明星大学教授　小川　哲生
埼玉大学助教授　清水　直治
早稲田大学教授　染谷恭次郎
武蔵大学教授　村田　晴夫
東京都立大学助教授　山川　仁
早稲田大学絵画会
早稲田大学教授　片山　覚
早稲田大学教授　平澤　茂一
法政大学講師　古澤　聡司
東京都立大学教授　清水　誠
恵泉女学園短期大学英文学科総合科目「国際」
工学院大学教授　吉田　倬郎
東京外国語大学リーダーシップトレーニング
早稲田大学教授　川原　栄峰
東京学芸大学助教授　出口　利定
東京理科大学狩野・高橋ゼミ
東京外国語大学教授　原　誠
芝浦工業大学教授　藤澤　好一
東京経済大学教授　小林　三衛
白梅学園短期大学教授　民秋　言
早稲田大学理工学部AI研
東京薬科大学生活協同組合
中央大学教授　高窪　利一
東京学芸大学AITC
ルーズベルト大学ELP英語研修
大月短期大学教授　村越　洋子
八千代国際大学基礎演習ⅡKゼミ
桜美林大学ヴォランティアグループ
青山学院女子短期大学児童教育学科
保育実習総括合宿
日本女子体育短期大学助教授　常田奈津子
日本社会事業大学助教授安立　清史
都留文科大学教授　後藤　道夫
立正大学教授　厚東　偉介
聖学院大学助教授　西谷　幸介
佼成学園高等学校数学研究同好会
子供会コロボックル
国立大学図書館協議会
第12回社会学合同セミナー
第157回大学共同セミナー
グレインフォーメーションワークショップ
第13回国際学生シンポジウム
国際学生シェイクスピア連合
21世紀の心理学を考える研究会
日韓学生フォーラム
大学天文連盟
郡内研究会
土曜会
数論セミナー
からだとことば研究所
日本コトバの会
ネイチャーゲーム研究所
プロセスサポーター
文学教育研究者集団
日本テキサス・インスツルメンツ
コニカ／富士電機／オタリ／東芝コンピュータエンジニアリング／小澤事件弁護団／東京海上システム開発／市光工業
（個人利用）
成城大学講師　薗田　碩哉
北野キリスト教会牧師　福澤　満雄
V研究会　吉本　昌司
東北学院大学教授　岡本　英男
杉野女子大学教授　田村　皖司

■**1月**（31グループ、延一、三七七人）

駒沢大学教授　上條　末夫
上智大学教授　磯見　辰典
中央大学教授　石川　晃弘
大妻女子大学短期大学部助教授　服部　孝彦
東京学芸大学教授　谷　俊治
東海大学教授　師岡　孝次
東京経済大学教授　色川　大吉
東京都立大学教授　鴇田　忠彦
東京都立大学助教授　日向野幹也

国際学生シンポジウム—全国46大学からの290名が熱気溢れる討論を繰り広げた（'91. 12. 14）

平成3年度
協力会員校事務連絡会
'91年12月4日／10時半～16時

この連絡会は、開館翌年の第1回から数えて通算で22回となる。本年度も、日頃会員校側の窓口となっておられる学生課・教務課等の職員の方々41名（32校）の出席を得て開催された。

午前中は小岩専務理事ほか関係職員による当法人の事業全般についての概況説明とキャンパス一巡の施設見学が行なわれ、午後の協議会では大妻女子大学学生部長の小林靖之氏を座長に約2時間、各校の当施設利用を中心に意見・情報の交換があった。

「環境は全く申し分ないが、夜の移動のためにも足場をもう少しよくして」「各部屋にせめて水道とトイレくらいは欲しい」など率直な要望も出されたが、一方、担当者の多くから、当施設の特徴を見直し、一層の有効利用に向けPRにも工夫してゆきたいとの声を聞くことができた。

短時間ながら、相互に理解を深め合う機会となったことは幸せであった。

（出席者）
東京（廣瀬治勇、金城政孝）・一橋（橋本恵司）・電気通信（成澤洋子）・東京外国語（岡部久雄）・筑波（福田正、笹沼千枝子）・埼玉（木谷紘二）・東京都立（笹川義昭）・東京都立科学技術（小塚朗永）・早稲田（大西正泰）・日本女子（田宮良子）・慶応義塾（平野和子、多田あづみ）・明治（中原將子、宇佐見章子）・中央（小俣方忠好、大井和明、山ノ井和哉）・立教（栄井章博）・日本（斎藤直樹、植草敦）・東京女子（神谷候子）・武蔵工業（片岡ゆき子）・明治学院（川村信雄）・成蹊（岡田かおる）・津田塾（石田六一）・国際基督教（井出次男）・大妻女子（小林靖之）・学習院（菅野雅久）・芝浦工業（最上文孝）・東海（小平孝雄）・駒沢（芝道弘）・東京薬科（佐藤勇次）・淑徳（小川雄也、小野寺利幸、田島豊）・東洋英和女学院（松田里子）・東京工業高等専門学校（布川みつ子）・東京都立商科短大（梅本利子）・文教大学女子短大部（須原洋）（敬称略）

協議会で——32校・41名の担当職員が意見・情報を交換した

東京理科大学狩野・高橋ゼミ
東京外国語大学助教授　田島　信元
東京都立大学教授　中本　正智
明治学院大学助教授　中野　敏子
順天堂大学医学部P3クラスセミナー
東京神学大学第23回教職セミナー
第3回大学教員研修プログラム
おとな・こども研究会
厚生省心身障害研究岡班研究会議
キリスト聖書塾女子青年部
からだとことば研究所
多摩教育センター日本語研修所＊
日本レクリエーション協会
山王教育研究所
雪印物産／富士ファコム制御／オタリ／国際交流サービス協会／東京都共済農業協同組合連合会／京王アートマン
〔個人利用〕
クオリティマネジメント森　彰

■2月（84グループ、延三、五七一人）
中央大学教授　亀山　三郎
中央大学教授＊　池田　正孝
東京大学教授　高階　秀爾
中央大学教授＊　高柳　先男
駒沢大学教授　寺中　良二
明治学院大学人形劇団ZOO　森　武麿
駒沢大学教授　堀井　啓幸
帝京大学教授
慶応義塾大学ワグネル・ソサィエティー男声合唱団
早稲田大学生協学生委員会
青山学院大学教授　寺東　寛治
明治大学教授　牧野　誠一
明治大学教授　根本　孝
津田塾大学教授　伊藤　俊次
明治大学教授　池上　秋彦
東京電機大学リーダーズ・キャンプ
武蔵大学体育連合会リーダースキャンプ
法政大学法学部学術団体＊
東京理科大学新聞会
明治学院大学二部英語会
早稲田大学教授　新澤　雄一
東京都立大学教授　茂木　俊彦
東京学芸大学教授　堅田　明義
明治学院大学教授　加藤　典洋
東京都立立川短期大学教育実習
帝京大学書道部
東京都立大学教授　吉岡　知哉
東京女子大学社会理論研究会
明治大学学生保険組合学生保険委員会
東京純心女子短期大学音楽・美術・英語学科卒業研修会
立正大学助教授　大津　悦夫
専修大学教授　原田　博夫
清泉女子大学講師　磯見　辰典
独協大学教授　加藤　僖重
東洋大学教授　藤木三千人
多摩大学教授　井上　宗迪
東京女学館短期大学学生リーダーズ・トレーニング
聖学院大学・女子聖学院短期大学キリスト教グループ交わりの会
専修大学助教授　野口　旭
聖学院大学ハンドベルクワイア
国際教育交換協議会
十大学合同セミナー20周年記念企画
子供会コロボックル
マックス・ヴェーバー『ロシア革命論』研究会
日ソ学生会議
アイセック一橋大学委員会
グループアプローチ研究会
フォ+カシング原宿
キリスト聖書塾
東京都高等学校教職員組合第7支部青年部
ネイチャーゲーム研究所
未来塾
日本キャンパス・クルセード・フォークライスト
緑の地球防衛基金
日本山岳協会
ヒューマンライフセンター／アイワールド／ベルモント化粧品／富士電機／京セラ＊／日野自動車工業／フクダ電子＊／エイ・エス・ティ／コニカ／ノヴァ／不二サッシ／東京スバル自動車／パーソンズ／東芝プロセスソフトウェア／アインシュタインインスティテュート／雪印物産／伊勢丹データーセンター／京王アートマン
〔個人利用〕
東京理科大学教授　山田　善靖
大阪市役所　根来　譲二
V研究会　吉本　昌司
東洋大学教授　堀　光男
明星大学通信教育部　味原　久子

予　告

第4回大学教員研修プログラム

主題：よりよい大学教育の方法を求めて
――若手教員に期待するもの――
期日：1992年8月26～27日（水～木，1泊2日）
定員：50名
申込締切：7月31日（金）

《趣旨》

FDプログラム小委員会では，「よりよい大学教育の方法を求めて」と題し，その実践面に焦点を絞ってこれまで3回の研修プログラムを実施してまいりました。幸い大学教育方法等改善経費が受けられ，昨年度は，これまでの経験に基づいた独自開発の『FDハンドブック』を完成させることもできました。本年度からは，大学教員研修プログラムを若手教員向けとベテラン教員向けとに分けて開催する運びになりました。今回はその若手教員向けにあたります。大学教員として数年の経験しかお持ちでない若手の方々にお集まりいただき，『FDハンドブック』に従って進めるプログラムであります。それぞれの課題意識を深め，よりよい授業のあり方を探ってまいります。

第29回大学教員懇談会

主題：動き出したか？　大学改革
期日：1992年9月26～27日（土～日，1泊2日）
定員：60人
申込締切：9月18日（金）

〈運営委員〉
（委員長）慶応義塾大学経済学部教授　小池生夫氏
中央大学商学部教授　建部正義氏
東京都立大学理学部教授　戸張よし子氏
東京大学教養学部教授　平野健一郎氏
東海大学理学部教授　安岡高志氏

◆問い合わせ・募集要項の請求先＝企画室
☎0426-76-8532（直通）

利用料金の改訂について

利用者の皆さまのご負担をできるだけ軽く、との基本方針にもとづき、当ハウスはここ10年来、ほとんど実質的な値上げをしないでしのいでまいりました。しかし、開館以来26年を経て、一部施設の老朽化に伴う諸種の改修も必要となり、また、食事についてもご不満のないような質・量を確保しなければなりません。

このたび、新年度'92年4月1日以降の料金のうち、宿泊料と食事代を左記のとおり改訂させていただくことになりました。ご理解とご協力のほどをお願い申し上げます。

①**宿泊料**（1泊につき）は、学生が三〇〇円、その他の方々は四〇〇円、②**食事代**（3食につき）は計三〇〇円（従来の計二、〇〇〇円が二、三〇〇円に）、それぞれ値上げとなります。会員校学生のユニット・ハウス利用の場合の1泊3食の料金は四、五〇〇円です（これに施設改修協力金三〇〇円は従来どおりです）。

館長室から

暖冬だったせいか、枝垂桜は例年より一週間早い開花、本館前のその薄紅色の大きな花襖（ふすま）の見事さにみとれているうちに、雑木は色とりどりの芽出しから新緑へと急展開、アッという間にこの丘は、緑一色に塗りつぶされてしまいました。

冬季三ヶ月の活動の模様を御届けする「ニュース」ですが、この編集を終える今、ハウスは、花から緑への春たけなわのなか、各大学の新入生オリエンテーション合宿で大賑わい。丘を往き交う若人の姿と声に溢れる活気が感じられます。その一コマを表紙にしてみました。

連日の盛況に、フロントも整備サービスも天手古舞で、嬉しい悲鳴をあげ、企画室は更に、ベテランスタッフの退職で多忙を通り越す忙しさ。でも職員一同、キャンパスにみなぎる若々しい力に負けない、活気にみちた活動を続けています。この日常の動きのなかに、新しいセミナー・ハウスの展開を目ざす心が感じられることは、嬉しい限りです。（岡）

「セミナー・ハウス」（一二六）一九九二年四月二五日号　発行＝財団法人大学セミナー・ハウス　〒一九二―〇三　東京都八王子市下柚木　☎〇四二六―七六―八五一一　振替口座　東京五―七四五九〇番／編集＝大学セミナー・ハウス企画室／編集・発行人＝岡　宏子／制作＝中央公論事業出版